

群 教 セ	G01 - 04
	平 29. 265 集
	国語一高

聞き手の立場に立ち、 目的に応じた伝達ができる生徒の育成

—企業のプレゼンテーションの分析を通じて—

特別研修員 片岡 美穂

I 研究テーマ設定の理由

平成 28 年 12 月の中央教育審議会第 197 号答申では、アクティブ・ラーニングの視点から授業改善に取り組んでいくために、より一層の言語活動の充実が必要であること、国語科が中心的役割を担いながら他教科などと連携して言語能力の向上を図ることの重要性が指摘され、国語科による言語能力の育成が全ての学習の基盤であることが確認された。

専門高校である所属校は、農業科の「地域連携」や「課題研究」の授業などにおいて、研究発表やプレゼンテーションを行う機会があるが、自分の言葉で発表することや、自ら工夫した発表を行うことを苦手とする生徒が少なくない。これは、自分の研究成果や考えを効果的に伝える方法が分からずにいることと、発表そのものに慣れていないことに課題があるためと考えられる。これらを改善するには、生徒が目的に応じた伝達の方法を理解し学ぶとともに、それを活用する実践の場が必要であると考えた。そこで、効果的で説得力のある手段や方法が選ばれ実践されている企業のプレゼンテーションの分析を軸に、その知見を活用した実践を行うことを手立てとして、研究テーマ「聞き手の立場に立ち、目的に応じた伝達ができる生徒の育成」を設定した。なお、本研究は、今後、農業科の授業などでも実践を行うことで、国語科の授業で学び身に付けた言語能力を、他教科の学習に活用・応用する力を養っていく教科間連携を想定していることを付記する。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

○目的に応じた伝達の手段・方法を、生徒自身が発見できるようにするために

手立て1 企業のプレゼンテーションを分析させる

二つの企業のプレゼンテーション動画を視聴させ、シートを用いて手段・方法などを比較、分析させる。分析した手段・方法について聞き手の立場で評価させ、その効果を理由とともにグループで考察させてクラスで共有する。

○分析した手段・方法を活用して、聞き手の立場に立ち目的に応じた伝達ができるようにするために

手立て2 分析を基にして検討・実践・評価させる

分析した手段・方法を活用したプレゼンテーションをグループで検討、実践させる。各グループのプレゼンテーションを、評価シートで評価させる。評価をグループでまとめさせた後、クラスで共有させ、自己評価と他者からの評価を比較しながら目的に応じていたかを考察させる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 「聞き手の立場に立つ」ことを一貫して重視してきた結果、実践する側・視聴する側の両面において、「聞き手がどのように受け取るか」を最重要事項と捉えて取り組むようになったことは生徒の大きな変容の一つである。「聞き手の立場に立つ」ことこそが、「伝える」ことの大前提であることを実感とともに認識できたことで、プレゼンテーションは無論、その他の言語活動やコミュニケーションの場においても、聞き手や相手の立場を考えた伝達を心掛け身に付けていくことが期待できる。
- 今回の授業に対する生徒の意欲は非常に高く、分析の単元から生徒たちは熱心に動画を視聴し、その優れた手法を吸収しようとする姿勢が強く表れていた。実践においてそれは顕著になり、分析で得た手法や自分たちなりの発想を駆使し、楽しみながら実践に取り組んでいた。生徒が抱く「退屈」で「面倒」なプレゼンテーションのイメージを払拭し、「ああいうプレゼンテーションをやってみたい」「やるにはどうすれば良いのか？」と思えるような、洗練された企業プレゼンテーションに触れたことが、今回の取組が奏功した最大のファクタであったことは言うまでもない。今回の実践は、目的に応じた伝達の方法を理解し学ぶ上で、企業のプレゼンテーションが優れた教材となりうることの証左であるとともに、教材の選定が生徒の学びを大きく左右することを再確認させてくれるものとなった。
- 最大の成果は、自分たちで思考し作り上げることの楽しさと充実感を、生徒が身をもって理解できたことであろう。与えられたものを受け取り、言われるがままに取り組むのではなく、自分たちの頭で思考し、工夫し、協力して作り上げていくことがいかに楽しいことであるか。それを実感したことは、今後の生徒の学びの姿勢にも大きく影響を与えるはずだ。しかし、同時に、その難しさや奥深さも、生徒たちは今回の実践で経験している。今回の取組によって、生徒が「伝える」ことにより意識的になり、場面ごとの目的に応じた伝達の方法を考え模索していくようになったとすれば、「伝える」力の育成における第一ステップとしての本研究のテーマはクリアされたと言えよう。

2 課題

- 今回の実践は一つのテーマで行っただけだが、プレゼンテーションの検討と実践を繰り返し行ってこそ、目的に応じた伝達の力は育成されていくと考える。生徒の熱量が損なわれないうちに、多様なテーマによるプレゼンテーションの実践に取り組みせ、それぞれの目的に応じた伝達について思考させることで、その実践力と伝達力はより磨かれていくであろう。
- 本研究では、「評価」に重点を置き、分析後・実践後いずれにもその段階を踏ませている。目的を持った伝達である以上、その達成度は正しく測られるべきであるからだ。しかし、生徒の評価規準が定まっていないこと、また今回の評価シートでは大まかな評価項目しか設けなかったことから、多様な側面から批評的に評価できる生徒は少なかった。今後は、評価項目を細分化し、目的に応じた伝達のためにはどのような視点で評価すべきか、生徒自身にも考えさせながら評価し合わせたい。

実践例

1 単元名 「企業のプレゼンに学ぶ“伝え方”後編」（第2学年・2学期）

2 本単元について

1学期に行った「企業のプレゼンに学ぶ“伝え方”前編」（次頁注）では、二つの企業による新製品発表のプレゼンテーションを教材として用い、聞き手の立場から比較、評価する中で、効果的だと思われる手段・方法を生徒たち自身が分析した。本単元では、分析で挙げた手法を活用して、目的に応じた“伝わる”プレゼンテーションの実践を行う。数あるプレゼンテーションの手法の中から、より相手に伝わりやすく、自らのプレゼンテーションに導入したいと思える方法を生徒自身が考え選び取ることで、伝える内容と目的に応じた伝達の仕方について、積極的に思考するようになることを企図している。前単元に引き続き、本単元でも、導入として企業のプレゼンテーション動画を視聴させた上で実践に取り組みさせる。自分たちが行う前提での視聴は、プレゼンテーションのイメージや手法の確認のみならず、より広範かつ細部にわたる発見を生むであろう。実践では、ワークシートで対象、目的、ねらいを明らかにした上で、手段や材料、構成などを検討するとともに、聞き手の立場からの評価と自己評価の二方向から精査することで、「目的に応じたプレゼンテーション」を意識するよう図った。企業の“生きた”プレゼンテーションから、生徒自らが目的に応じた伝達の手法を分析、抽出し、活用して実践しながら方法論を身に付けていく過程に、知識・思考・表現の広がりあるいは深まりが望めるであろう。

このような考えから、以下の指導計画のとおり本単元を構想し実践した。

目標	企業のプレゼンテーションで分析した手段・方法などを活用して、相手に伝わるプレゼンテーションをする。（話すこと）	
評価 規 準	関心・意欲・態度	・手法や材料、構成などについて、目的に応じているかどうか、他者との意見交換によって考えようとしている。
	話す・聞く能力	・分析した手法を活用し、目的に応じたプレゼンテーションをしている。 ・目的に応じているかどうか、聞き手の立場で評価している。
	知識・理解	・プレゼンテーションで自ら工夫した点、身に付けた点を理解している。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第1時	・グループに分かれ、実践するプレゼンテーションの対象、目的を確認する。 ・企業のプレゼンテーション動画と前回のシートで、分析のまとめを確認する。 ・目的に応じた手法や材料、構成などを、準備シートを用いてグループで検討する。
	第2時	・必要な材料などを収集、整理し、構成を練り練習する。 ・手法や材料、構成などが目的に応じているかどうか、グループで検討し修正する。
課題追究	第3～4時	・グループごとにプレゼンテーション(3分間)をする。 対象：所属校を受験するか迷っている中学3年生 目的：所属校を受験したくなるよう所属校の魅力を伝えること ・評価シートで評価し、グループでまとめた後、クラス全体で共有して考察する。
	第5時	・各グループのプレゼンテーションの評価を、ホワイトボードと黒板でまとめる。 ・自分が工夫した点、身に付けた点を評価シートで自己評価する。 ・今回身に付けたことや反省点を、次回どのように生かすか評価シートに記入する。
まとめ	第5時	・各グループのプレゼンテーションの評価を、ホワイトボードと黒板でまとめる。 ・自分が工夫した点、身に付けた点を評価シートで自己評価する。 ・今回身に付けたことや反省点を、次回どのように生かすか評価シートに記入する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全5時間計画の第3時に当たる。第1時では、企業のプレゼンテーション分析の結果をまとめるとともに、今回生徒たち自身が行うプレゼンテーションの対象と目的を確認した。また第1時後半と第2時で、目的に応じた手法や材料、構成などについて、グループで検討、練習、修正を重ねてきている。本時では、四つのグループがプレゼンテーションを行い、分析した手法を活用しているか、目的に応じたプレゼンテーションになっているかを、視聴する生徒が聞き手の立場で評価するとともに、評価した内容をクラス全体で共有することとし、次のように手立てを具体化した。

(1) 導入

前単元で行った分析をまとめ、準備シートやメモから前時の練習を振り返らせる。

(2) プレゼンテーションの実践と個人による評価

- ・グループごとにプレゼンテーション（3分間）をさせる。
- ・分析した手法を活用しているか、目的に応じているかを評価させる。どのプレゼンテーションがより伝わったか聞き手の立場で評価させる。

(3) 評価の共有

- ・活用していた手法の確認と、良かった点・改善点についてグループで意見を交換させる。
- ・挙げた意見をホワイトボードに記入させ黒板に掲示し、評価内容をクラスで共有させる。プレゼンテーションをしたグループの自己評価も掲示し、自己評価と他者からの評価とを比較させる。

注) 前単元「企業のプレゼンに学ぶ“伝え方”前編」の授業

前単元では、企業の新製品発表のプレゼンテーションを教材として扱った。その成果が経営や利益に直結するがゆえに、効果的で効率的な方法が選択、実践されている企業のプレゼンテーションは、目的に応じた伝達のエッセンスを抽出し分析するのに最適な教材であると考えた。展開は以下のとおり。

- ・二つの企業によるプレゼンテーション動画を視聴し、特徴や手法などを比較、分析する。
- ・特徴や手法などが適切か、聞き手の立場で評価した後、どちらがより伝わったかを評価する。
- ・個人で分析、評価した結果を、グループで共有した後、クラス全体でも共有し分類する。
- ・挙げた意見から、より相手に伝わる手段・方法などを、理由とともに考える。
- ・自分たちのプレゼンテーションに導入したい手段・方法なども同時に考える。用いられていた手法だけでなく、それらを組み合わせたもの、発展させたものが考案できれば取り入れる。

4 授業の実際

(1) 導入

授業導入において、生徒は、前単元で行った分析のまとめと、準備シートやメモから前時の練習の振り返りを行うとともに、「企業のプレゼンテーションで分析した手段・方法などを活用して、相手に伝わるプレゼンテーションをする」という本時の目標を確認した（図1）。また、配付された評価シートの観点や項目と、対象及び目的の再確認に加え、「目的に応じたプレゼンテーション」を実践し評価できるようにするために、プレゼンター、視聴者ともに、対象となる聞き手の立場を踏まえるよう改めて促した。



図1 準備シートを活用した前時の振り返り

(2) プレゼンテーションの実践と個人による評価

全8グループのうち4グループが、3分間ずつプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの対象は「所属校を受験するか迷っている中学3年生」とし、目的は「所属校を受験したくなるよう所属校の魅力を伝えること」とした。生徒たちも2年前は対象と同じ立場だったので、聞き手の立場を想定しやすいであろうし、生徒だからこそ分かる所属校のよさや魅力を伝えてほしいと考えたためである。プレゼンテーションでは、分析した企業の手法を用いて、工夫を凝らした実践が行われた（図2）。声の大きさや抑揚、分かりやすい言葉遣いなどの基本的な事項は全てのグループが達成していた。



図2 プレゼンテーションの実践

さらに、視聴者への問い掛け、他校との比較、地図や画像の効果的な挿入といった、分析した手法の活用はもちろん、人気芸人のものまね、テーマパークのガイド風の説明など、聞き手である中学3年生を意識した多彩なプレゼンテーションが実践された。視聴する生徒は、手法の確認や目的に応じているかに着目しながら見た後、「活用していた手法」「良かった点（内容、資料など）」「ココを直すといい」の3項目について、2分間でシートに記入した。良かった点だけでなく、次回により良いプレゼンテーションが作れるよう、改善点も積極的に記入するように指示した。生徒は熱心に視聴し、詳細に評価していた。

(3) 評価の共有

個人による評価シート記入後、どのような評価をしたかを4～5人のグループで共有しまとめた。その結果をホワイトボードに記入し、黒板に貼って、プレゼンテーションごとに評価内容をクラス全体で共有した。その際、プレゼンテーションをしたグループにも自己評価をさせ、自己評価と他者からの評価とを黒板上で比較しながら実践を振り返った(図3)。自己評価の内容と他者からのそれが一致しているグループが多く、客観的に自分たちのプレゼンテーションを振り返ることができたとともに、全グループに共通する改善点や、評価が高いグループの成功した点を考えるなど、次回につながる共有の時間となった。



図3 自己評価と他者からの評価との比較

5 考察

設定した対象と目的とが、生徒にとって取り組みやすいものであったことが、プレゼンテーションに対する意欲につながり、検討や練習の随所に、生徒同士による積極的で対話的な活動が見られた。どの生徒にも親和性のある課題により、協働的な活動が促進したと言える。また、聞き手の立場を想定しやすい設定としたことで、どのような伝え方をすれば目的が達成できるかについて、生徒の主體的な思考を促すことができた。分析で見いだした効果的と思われる手法に、自分たちなりの工夫を交えて、仲間と「どうしたら対象に伝わるか」について考え、試行し、検討して練り直すといった姿勢が各グループに見られた。これまでの、受動的に一つの正解を求める生徒の姿から、答えを自ら考え作り出そうとする姿へと変容したことは、今回の実践における最大の成果である。一方、各グループとも手法を生かし、工夫を凝らしたプレゼンテーションができた反面、伝える内容はどこも似通ったものであったのは残念である。中学3年生という対象に対し、アピールしたいものが偏るのはやむを得ないが、手法をある程度身に付けたら、コンテンツの差異化にもいづれは着眼させていきたい。

プレゼンテーションの検討、実践において、「聞き手の立場に立つ」ことを常に意識させたことで、聞き手がどのように捉えるかを重視した伝達方法を身に付けることができた。また、準備シート・評価シートのいずれにも、前単元の分析結果を掲載し、随時確認させたことによって、分析した手法を生かした検討、実践及び評価ができた。手法の分析だけでなく、それをを用いた検討、実践、評価を行ったことで、生徒は、目的に応じた伝達の手法を自分の力にすることができたと言えよう。

さらには、個人による評価の後の、クラス全体での評価の共有において、自己評価と他者からの評価を比較したことで、実践に対する気付きや考察が深まった。自分たちの意図と共通あるいは相違する他者の視点は、次回行うプレゼンテーションに対する新たな発想や意欲を喚起した。今回、他のグループを見て自分たちの手法や構成をブラッシュアップしていく様子が見られた。これらのことから、今後もこの活動を繰り返すことによって、生徒同士若しくはその他の伝え方から学び、目的に応じた伝達の方法を生徒自身が発見し、身に付けていくことが期待できる。